

養育里親

～もうひとつの家族～

21

坂口 伊都

はじめに

里子の生活も小学校卒業という一つの節目にきました。進学は、特別支援学校中等部です。在籍の小学校からの進学は1人なので、不安や寂しさを感じることもあるでしょうが、小学校時代の先輩や放課後等デイサービスの仲間もいる場所なので、嬉しさも入り混じっている様子です。

小学校とは、丁寧に連絡を取り合いながらやってきました。学校側も「里子」の受け入れに戸惑ったことだと思います。先生方が皆、この子のいいところはどこかを探してくれたり、なだめたり、おだてたりしながら可愛がってくれたと感じています。児童相談所のワーカーも放課後等デイサービス事業者の方もこの子を真ん

中に据えていろいろな話し合いを重ねてくれました。

もちろん、学校でも落ち着かない時期もありました。支援学級在籍ですが、さらに引き抜きをして落ち着ける場所に移動することも考えてもらったこともありましたが、実施には至らなかったようです。

この子は、4年生の2学期から児童養護施設から里親家庭、特別支援学校から小学校の特別支援教室に身を置き、今まで学んできたやり方では上手くいかないことが続いたのだと思います。家庭では大人数から5人へ、学校ではクラスの中で過ごす体験をして、少人数から大人数へと物理的な変化を経験しています。このような経験を多くの人が体験するわけではありません。療育手帳を所持しているので、この経験のわかりにくさがあったでしょうし、それを誰かに訴

える手段を持ち合わせていない不利益さもあつたでしょう。この子自身が、変化に対応していく大変さは、私が想像する以上なのだろうと思います。そして、家庭も学校も同様にわからなさ、あるいはわかってあげられなさを抱きながら葛藤する日々でした。

今回は、里子の新たな門出とその周辺について書いていきたいと思つています。どうぞ、最後までおつきあい下さい。

卒業式まであと少し

里子は、卒業式前の2月末にインフルエンザB型に罹りました。学校では、インフルエンザで休む友達を見て、「俺もインフルエンザに罹りたいわ」と言っていたそうです。いざ罹ると「車酔いや、これは車酔いや」と吐き気を訴えていました。学校を早引きをして、夕刻に高熱になって内科に行き、タミフルを服薬してもその日の夜は「頭が痛い、どうしたらいい？」と唸っていました。その日の晩御飯から自室で取るようにして、初日は父が予防接種を受けていたので二人で食べてもらいました。

翌日には、熱も下がり、もう熱を測らなくても大丈夫と言ひ張りますが、「測らないと学校に行けないよ、いいの？」と言ひながら、何とか測っていました。自室で一日を過ごすのは退屈だろうと、三食には毎食フルーツをつけたり、おやつにもプリンやいつもはあまり買わない苺を出して、やたら豪勢にしていました。マスクをすれば、リビングにいてもいいよと伝えたのですが、マスクはどうしても嫌なようで3日間部屋生活でした。その間ガンダムのプラモデルをひたすら作っていたので、数カ月かけて作る予定でしたが、インフルエンザで休んでいる間で完成させてしまいました。

憧れのインフルエンザが、かなり退屈だと学

びながら、いつになったら学校に行けるのか指折り数えていました。待ちにまった学校ですが、初日は体力が落ちていたようで、思ったよりテンションも上がらずに過ごしていたようです。担任の先生は、インフルエンザで休んでいる間、この子にいろいろと手伝ってもらったり、頼っていたのだなあと感じたそうです。学校でも悪態になってしまう息子ですが、役に立っていたのですね。

卒業式の1週間前ぐらいから、担任の先生の後追いが始まり、教員の皆さんが微笑ましく見守ってくれていたそうです。担任の先生は、トイレに行くにでも事前に伝えなければならず、ちょっと先生の姿が見えないと「どこ行つた？」と聞きまくり、職員室に「おぼさんいるか～」と言ひながら訪問するので、また来たなと噂になっていたそうです。

担任の先生は、受け持ってくれていた間、何度も何度もこの子の担任が私で良かったのかと自問していたそうです。それが、この後追いで、良かったのだと答えが持てたと教えてくれました。私も繰り返し、この子は我が家に来て本当に良かったのか、私が里母で良かったのかと考え込んでいるので、同じように悩んでくれたのだと知りました。先生と私は、この子を育てていく同志でした。同じ女性という立場で、この子に向き合い、反発され苦しみながら支え合っていたのです。

ある時、里子に「お母ちゃんのこと、どう思っているの？」と尋ねると「何とも思っていない」と言われました。何かショックでした。次に「じゃあ、父ちゃんのことはどう思っているの？」と聞くと「何とも思っていない」「好きじゃないの?」「今は、何とも思っていない」と言ひます。じっくりと聞き込んでいくと、この子にとって「何とも思っていない」は、OKだという意味なのかなと伝わってきました。特別や大事という意味合いになるのかなと。本当にこの

子の言葉の翻訳はやっかいです。傷つける言葉を使いながら真逆の意味だったりします。

その担任の先生の卒業文集を紹介します。この支援学級は、6年生が1人だったので里子宛てになっていて驚きました。

ません。里子も先生方に声をかけられ、何でもないよという態度をとりながら、明後日の方向を向いて嬉しそうにニコッと笑っている顔を母はバッチリ目撃していたのでした。

素敵な出会いがあったのだと教えてもらいました。少しずつ、大人を信じたり、頼ったりしてもいいと知り始めているのでしょうか。卒業してからもせっせと小学校に通い、先生に会いに行っています。いないとしよぼくれているのですが、それを見せないようにしている様子も学びなのだろうなあと感じます。「寂しいって何？」と言っていた子でしたから、恋しくて会いに行き、会えなくてがっかりするなんて、素敵な経験ですよ。

新生活

この4月からは特別支援学校中学部に進学しました。同じ小学校から進学する子はいなかったのですが、小学校時代の先輩や放課後等デイサービス事業で知っている人がいて、本人は楽しみにしていたようです。

入学式は、小中高の合同で、新入生一人ひとり名前を呼ばれ、元気に「はい」と返事をしていました。かわいい小学1年生から大きい高校1年生までバラエティー豊かな入学式でした。

クラスは、中学部全体で組まれており、1年生から3年生までの混合で、うちの子のクラスは、生徒が6名で担任が男性と女性の先生2名が担任でした。入学式後、クラスに行くのですが、広過ぎて場所がわかりません。何回行っても迷子になるだろうなあという気がします。やっこの思いでクラスに着くと、自己紹介タイムでした。「好きな食べ物は？」と聞かれ「肉」と答えていました。前はそこにラーメンがついていたのですが、もしかしたら食べ飽きたのかもしれませんが。少しずつ、食べ物の好みや行動が変わ



〇〇へ

ご卒業おめでとうございます。

本当は優しい〇〇くん。人のために何かをしてあげることが大好きなのに、自分の気持ちを上手に相手に伝えることができず、たくさん葛藤していましたね。

「もういい。」と言わず、「一人でいいんだ。」と強がらなくても、あなたの優しさに気付いてくれる人は必ずいます。

そして、その言葉遣いの奥に隠れた優しさに気付いて、あなたの言葉や行動を叱ってくれる先生や友達こそが、あなたの本当の味方です。

笑いあり、涙あり、怒りもあり、あなたと過ごした毎日を、わたしはずっと忘れません。

あなたが、自分を思ってくれる人の言葉にきちんと耳を傾け、心も体も健やかに成長できるよう、心から祈っています。

卒業式では、息子を見るよりも担任の先生の泣き顔を見て、こちらもグッとこみあげてくるという変わった体験をしました。終わることがわかっているけど、終わることが不思議でなり

っていくものだなあと思います。

特別支援学校に進みましたが、メリハリがある学校生活をしているようです。自分でできることは自分でやりきれるように、自分の気持ちや思いを言葉で相手に伝え、相手の気持ちを受け入れて折り合いをつけながら生活する力をつける等、この子の苦手なことにもペースを合わせながら培ってもらえるのだと思うと心強いです。

何が関係しているのかわかりませんが、この子は年下の位置にいと落ち着いているのですが、最上級生になると偉そうに振舞わなくてはと思うようで、乱暴な言動になってしまうようです。偉そうにしないで大丈夫だという学習をするためには、何を意識したらいいのかなあと考えています。人を気遣ったり、やさしくもできるのですが、悪くしておかなければならない感じも抜けません。いい子でいと落ち着かないのでしょうか。やれやれ。

家庭訪問で、担任の先生が2人共来てくれました。個別計画書を製作して持ってこられたのですが、この短時間で情報を集めて、よく観察してこの子の事をよく理解してくれているなあと感じました。いいところも悪いところも、その通りですと大きく頷く内容でした。この1年も先生と協調してこの子を育てていけそうかなと期待しています。

新生活になれてきたゴールデンウィーク明け頃から、小学校時代にしていたことが復活してきました。学校から渡される封筒類やお便りを隠します。封筒は、集金袋で中身は入っていません。お便りは、児童相談所に提出を求められている在学証明書の手続き書類等で、この子が叱られたりするモノではないのですが、これ何だろうと思うのか、無意識なのかわかりませんが、後ろめたい何かがあるのか隠そうとする時期があるように感じています。

何か変だなと感じていたら、やはりトラブル

発生でした。どうしてもモノやお金に関わる部分で上手く回らないことが起こります。人を信用しようとし始めていたり、アタッチメントの部分では、この家に来て良かったのだろうと思うのですが、モノやお金に関わる部分では、この家にいることがこの子にとってどうなのだろうと考え込んでしまいます。家族の中だけで考えてもよく見えないので、児童相談所の担当ワーカーや周りの人に意見を聞いてみようと思っています。

この子にとってモノは、刺激物として作用しているようなので、できるだけシンプルにしていこうと思っても、家は施設に比べ「モノ」や「お金」が身近にあります。できるだけ刺激物を減らす努力をしても限界があり、そこにトラブルが起きると信頼関係が揺らぎます。どう整理をし、何を大事にしながら過ごしていけばいいのかをみつけないといけない時期なのでしょう。頑張っているねと喜んでいる矢先に肩を落とすようなトラブルに出会うパターンは継続中です。そんなことが続いていくと疑心暗鬼になるし、何かしでかしていないか常に疑っているようで、これでいいのだろうかと思ってしまう。

この子を守っていくために何かした時は、早めに気付くようにし、間違った行動をした時は、その行為を責めるよりもその行為の意味を伝えるようにしています。自分が何をしたのかを知ることがいるのだろうなとこの子と過ごしながら感じたからです。その意味をこの子が納得すると、自分の中の言葉が出てくるような気がします。なかなか説明が苦手だったこの子も、「でもな」「なあ、俺の考えも聞いて」等言いながら、「母ちゃんは、俺といたくないんやろ。どうやったらいたくなる？」なんてことを言うようになりました。「そんなことは思っていないよ。ずっと一緒にいたいと思っているよ。でも、この行動はダメだね」「じゃあ、これからどうしたら

いいの」「ふいっと皆のモノを持っていたり隠したりしないで、いつも通り過ごせばいいよ」「それじゃ、いつもと同じやん。何かしないと・・・」
「いつも通りが大事。そのいつもを続けるようにしていくことが、これからしていくことだと思う」「それでいいの?」「それが大事なの」。こんな会話をしながら、「あなたの頑張っているところも知っている。母ちゃんは、あなたの事をいつも見ているから、いいところも悪いところも知っているよ。大丈夫、誰も追い出したいなんて思っていないよ。」と話す、納得したようで、「いつも通りにする」と言っていました。

自分の行動の意味を考えようとして、どんなに稚拙な言い方でも、誰かに説明しようとすることを支えることが、家庭で育てる強みになるのかなと感じています。

終わりに

春は別れと出会いの季節です。今年も息子が二人卒業と入学でした。18歳の息子も受験で苦しみました。親も辛かったです。親が頑張って何とかなるものでもなく、人生の中で初めて落ちるという経験を、傷つきも大きかったです。何とか居場所を確保して、釣りのサークルに入ったと聞くとホッとします。

人との繋がりが、春を運んでくるのですね。小学校の担任の先生と愚痴を言いながら励ましました。「私は、学校の中だけですけどお母さんはずっとですよ。」と声をかけてもらいました。何で、そこまで女性に反発しないとイケないのかなあという理不尽さを感じながら、一方で私だから駄目なのか、私でない方が良かったのではないかと自身を責めてしまう。そんな想いを共有できたことに意味は大きかったです。また、担任の先生もこの子と出会ったことで、特別支援教育に関心を持ってくれ、特別支援学

校への勤務も選択肢の一つに入れているそうです。

人の出会いは不思議なもので、それぞれ影響し合いながら関係を築いていくものなのですね。この小学校の卒業を機に女性に対する心象が、この子の中で変わってきたように感じます。女性を受け入れたり、認めたりできたのかなと思います。この前も、どこで聞いてきたのか「母ちゃんに俺、苦勞かけているから」何て言うのです。苦勞の意味わかって言っているのかなあと思いますが、そんなことを口にするようになったのかとくすぐったい気持ちになりました。

ここの家に来てからの積み上げは確かにあるのだと感じています。その一方で、ここの環境がこの子にとってマイナスに働いている面もあるということが現実なのだと思います。その両方を天秤にかけながら、それが迷いにもなっています。本当に、このまま一緒に暮らしていけるのかなあ、もう駄目なのかなあと何回思ったかわかりません。その度に、この子の言動に救われてきました。心理検査では、反省をすることは難しいと言われましたが、この子なりに内省をしているのかなと感じる場面も増えてきました。

後何回、もう駄目なのかなと思うのでしょうか。そう思う時の心的疲労は莫大なので、そう思うスパンが伸びてくれることを切に祈ります。私にとってこの子は、どんな存在なのかなと考えています。里子に限らず、実子に対しても複雑な感情を抱くので、我が子としての感覚に近づいたのかも知れません。自分自身の中の変化を自分で気づくことは難しいことなのですね。

